

塩原多助一代記
怪異談牡丹燈籠
籠釣瓶花街醉醒

名作類書全集

十

神明恵和合取組
侠客春雨傘
江戸育御祭佐七

版元

東京創元社

名作歌舞伎全集

第17巻 江戸世話狂言集三

昭和四十六年三月十日 発行



監修者

発行所

郡司正勝
山本二郎
戸板康二
利倉幸一
河竹登志夫

株式会社
東京創元社

代表者 秋山孝男

(店) 東京都新宿区新小川町一—十六
電話 (〇三) 二六八—八二三—
振替 東京 一五六五

印刷・株式会社 金羊社
製本・株式会社 鈴木製本所
用紙・株式会社 富士川洋紙店
写真版・(株)興陽社、(株)方英社

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

目次 (名作歌舞伎全集第十七巻 江戸世話狂言集三)

塩原多助一代記 (塩原多助)	(装置図 釘町久磨次)..... 三
怪異談牡丹燈籠 (牡丹燈籠)	(装置図 高根宏浩)..... 四
籠釣瓶花街酔醒 (籠釣瓶)	(装置図 高根宏浩)..... 二
神明恵和合取組 (め組の喧嘩)	(装置図 八木恵一)..... 五
俠客春雨傘 (春雨傘)	(装置図 釘町久磨次)..... 三七
江戸育御祭佐七 (お祭佐七)	(装置図 萩原勝美)..... 三五

解説

校訂について

戸板康二

郡司正勝

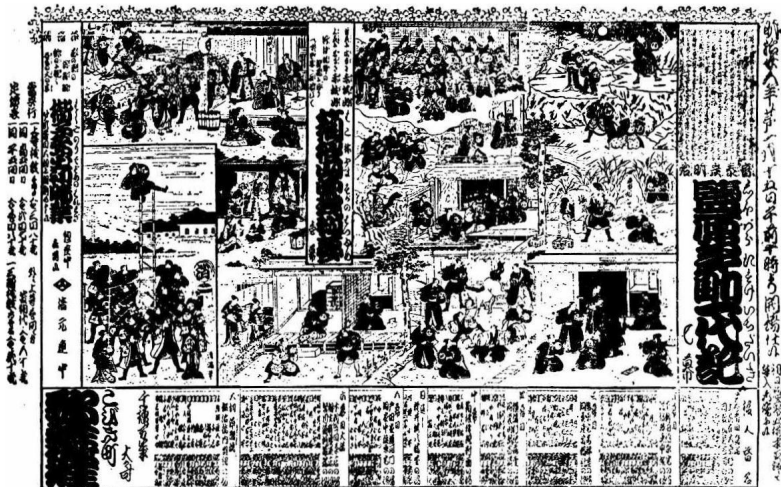
山本二郎

写真と資料提供―演劇出版社、演劇博物館、大谷図書館

梅村豊

塩原多助一代記

(塩原多助)



塩原多助一代記

戸板 康二

明治二十五年一月十五日初日の東京歌舞伎座で、五代目尾上菊五郎一座により初演された脚本で、作者は河竹黙阿弥の高弟三世新七である。

この新七は生涯八十余種の作品をのこしたが、講談や人情噺の脚色が多かった。そして、特に円朝の原作をかなり多く劇化している。本巻にのせた以外に、「榎名梅香えぬな うめか團扇うちやうせん絵」(安中草三)「粟田口鑑定折紙」(粟田口)「指物師さしものし名人長次」(名人長次)「成田道初なりた みちはつ首藪原」(藪原やぶら検校)等、いずれも名人円朝の話術を巧みにとり入れたものである。

この「塩原多助」は、円朝が、絵師柴田是真しばしんから聞いた本所の炭商人塩原太助の出世譚を事実について取材し、人情噺にして明治九年から十一年にかけて高座にのせたもので、円朝はこの種を仕入れるために、太助の郷里、上州沼

田へも旅行している。

全篇の構成には「越後の伝吉」「正直清兵衛」などが史実のほかにはいつて居り、また樽買いの久八が藤野屋に呼ばれて行つて、しくじるくだりは、落語の「にゅう」と同じ種である。戦後、この久八を主人公にし、初代吉右衛門に演じさせ、原作通り藤野屋の贅をつくした庭園へ通されるところを笑劇風に見せたことがあるが、これは落語種の「らくだ」(眠駱駝物語)の屑屋のうまかった吉右衛門に当てはめた企画であつた。

新七の脚本は「牡丹燈籠」の場合と同じく、円朝の話の発展に合せて忠実に脚色している。

まずはじめは上州大百村で、浪人塩原角右衛門の家来岸田右内が、旧主を世に出すために、偶然茶店で見かけた同姓同名の百姓、塩原角右衛門に五十兩を貸してくれと頼み、断られて谷間まで追つて行き、もう一人の(浪人の)角右衛門に鉄砲でうたれる。このあと、百姓角右衛門は、右内の悲願が真実であつたと知り、回向のつもりで五十兩を浪人角右衛門に渡し、その代り相手のつれてゐる幼子の多助(円朝も歌舞伎も、實在の太助を、多助としている)を養子として家へつれ帰る発端である。そしてその次に「此間十五年相立ち申し候」のピラを出して、塩原宅に変わる。

さてすでに次の幕では百姓の角右衛門は他界、ふしぎな縁でこの家に来ていたお亀は後家となり、連れ子のお柴は多助の嫁になっているが、この二人は心のよくない親子で、母は原丹次という武士、娘はその子の丹三郎と密通している。二人が原父子と夫婦になるためには多助を追い出さなければならぬ。分家の娘から来た多助への恋文を出して、お亀はきせるで折檻を加えるが、来合せた分家の太左衛門が、途中で拾ったお柴の丹三郎へ送った恋文をつきつけるので、何もいえなくなる。口惜しがった恋人たちは、多助を使いに出し、待ち伏せして暗殺しようという計画を立てる。

その次が、作場道である。塩原と書いた新しい桐油を鞍にかけた愛馬の青を曳いて出た多助は、青が虫が知らせたか一步も進まないで困っている。たまたま友達の円次郎が来るので、曳いて貰うと馬は歩く。ここで多助が、馬にまでばかにされるかと歎くセリフは哀れである。

次の庚申塚で、円次郎は馬を曳いて来たために、原丹次に竹槍で刺され、瀕死の姿で多助にこの土地を立ち退けと意見する。原作では、それと知らずに多助は内に帰り、一同はびっくりする。その後円次郎の死骸が発見され、お亀は多助が殺したといって又もや折檻する。このままでいては自分もきつと殺されると思い、多助は江戸へ出る決心を

することにしているのだが、円朝の話のほうでは一言もいわずに死んだ円次郎に、虫笛入りの合方で意見をいわせ、すぐにその言葉に従って、郷里を離れることになるという簡略化は、新七の機転といえよう。チョボも不自然でなく、挿入されているように思われる。

馬の別れは、この脚本の中で、ひとり舞台の見せ場で、つまり作中のクライマックスである。いなせな五代目菊五郎が、その柄を殺して、上州言葉の多助に扮し、あくまでも朴訥な人間を描き出したのが、評判をとった。もつとも竹の屋劇評集を見ると「此優なればこそこのむずかしい役を引受けて、是ほどにはよくせらるるなれ」「名人に相違なし」とはいつても、馬の別れについては「見せ場とは言へ、余り長し。友達の円二（円次郎）が其身と間違へられて突殺されしを見て、怖気に堪へず国違するほどの中で、斯う永々と馬に飼葉など宛がひて泣いて居ては、生死を見極めんとまた悪者が立戻って突直しをされんも知れず、危い事なり。恐しがる人情にも協はぬなり。此はオドオド気は急きながら馴染の馬の別れを惜むに立去りかねる事にしたし（下略）」といっている。

六代目菊五郎も、親ゆずりでこの役では評判をとったが、多分父親よりも、近代劇的な気分が多かったにちがいないと思っている。すくなくとも僕の見た印象では、歌舞

伎の感じが稀薄であった。

幕切れに、一面すすき原の舞台を半まわしにし、細い流れのある田舎道に馬をつなぎすてて見返りながら立ち去るという演出は、「円朝も及ばぬ」との評があった所である。

もちろん、この場合は、馬が多助をくわえたり、つながれて身もだえしてうなだれたり、その他いろいろな感情をあらわすので、その中にはいる役者にも、かなりの伎倆が要求される。「大森彦七」とともに、明治になってから、いわゆる「馬の足」にかなりの負担をかける芝居が出来たのはおもしろい現象だと思う。

ことに、次の沼田塩原宅で、多助がいなくなったあと、丹三郎とお栄の祝言の夜、この馬が狂い出して花嫁花嫁が噛み殺される場面でも、この馬は大いに動き、観客の感情を代弁するわけである。

長篇に二つの筋があるという原則は、この作の場合も適用され、別にまたたびお角と、道連れ小平の悪い母子を点出している。この二人は噺の方ではかなり早くから筋にからんでいるが、脚本の方では、祝言の次の幕、横堀村地藏堂にはじめて登場、村人に憎まれて沼田在からのがれて来た丹次とお亀の金を奪おうとする、河竹一流の殺し場の主役となっている。

次の雪山の崖道で、妙岳尼と称しているお角は丹次に殺

され、その丹次は小平に殺されるが、お亀は乳呑児をかかえて、岩角から足をすべらせて切り穴へ飛び込む。奪った胴巻を片手に、下を見込んだ小平が「雪にすべってどっさりと、落ちた数丈のこの下は、流れも早え吾妻川、親子は早瀬の水葬礼、これじゃアまるで詠えたようだ」という七五調のセリフは、師匠の「三人吉三」以来、伝統的な「厄払い」であり、そこへ本釣がきこえ、小平が空を眺めて思い入れ「幸い晴れた青空に、鐘のひびきもしんみりと」と胴巻の重味を引いてニコリ思い入れ、するとこの時日覆（天井）から雪なだれが落ち襟にかかり「オ、冷てえ」と身ぶるいするを木の頭、「びっくりさせやがる」と、その雪を払う。胸の透くような幕切れである。

多助と小平と、菊五郎が善悪二役を変わる趣向で演じたが、塩原宅の祝言の場が終ると、中幕として春狂言らしい「箱根山曾我初夢」という、曾我の芝居を一幕見せ、工藤に出た菊五郎が早変わり、月代ののびたかつら、絆纏に三尺というこしらえになり、宿場の廊の二階で前場を小平の見た夢ということにして、あり合小道具や落書を見て、口上茶番のようなことをいうのが大変受けたらしい。（この場の台本は、「歌舞伎新報」の一三二七号に載っている）この夢のさめる所ではじめて小平が出て来るのを、観客が待ちかねたといわれる。「村井長庵」の久八よりもっと

野暮で、「がんす」というような方言を使う菊五郎では、観客が満足できなかったのだということが、わかるのだ。

この小平は道中師であるから、セリフは江戸前でも、拵えは長脇差の股旅者の感じと見ていい。

一 次が江戸で、再び多助の幕である。郷里を出奔した多助は、(原作では)せっぱつまって昌平橋から身投げをしようにとした所を、山口屋善右衛門という神田佐久間町の炭間屋に救われ、その後同家の下男として働いている。たまたま戸田の家中に炭を運ぶ事になり、多助が届けて行くと、邸内の長屋に、塩原角右衛門というじつの親の名前を書いたよろい櫃があるので、驚喜して親子の名のりをするわけである。このへんは、講釈種の「清水一角」「赤垣源蔵」などと同様、幕末から明治にかけてできたチョボ入りの一連の脚本の類型通りで、武士道がかなり不消化な形に出ている。この幕だけは黙阿弥が書いた(その頃は師匠の加筆がよくあった)と、関根黙庵は語っている。

本所の四つ目茶屋になる。ここはその後、独立した多助がいつも落ち合うので親しくなった明梅買いの久八に、金の哲学を述べるところである。ここは、ほとんど円朝の通りである。

そこへたまたま来合せた子供づれの女乞食が、小平に川に突き落されたお龜の末路で、あの時命だけは助かったが

盲になって、江戸へ出てさまよっていることがわかる。

黙阿弥がそうであったように、円朝もつねにその芸の中で「勤善懲惡」の因果応報を説いたのだが、その円朝の作品を、黙阿弥が助筆以外進んで脚色しなかったのはおもしろい。何となく、反撥するものがあったのであろう。

この茶屋が藤野屋奎右衛門という御用達の富裕な商人の裏口に面しており、娘のお花は多助の人柄を見込んで彼を嫁にしたいという。久八がたのまれて仲人になるいきさつを、原作では落語風に話しているが、新七の脚本では、この筋はかげにして、多助とお龜の奇遇のくだりの間に、藤野屋へ久八が行って来ることになっている。

久八の話を多助が「今の話は駄目でがんす」と言い放ち、籠をかついでさっさと揚幕へ入るところを、「無欲の性根よく解りて、後に少しも気が残らぬ工合、無類なり。団十郎丈がいつぞや光秀役をつとめし折、草履つかみの猿面冠者、いで一とひしぎにしてくれんといふ文句にて、揚幕を見込みて大股に這入るところ、後より久吉に呼びとめらるといふ氣組少しもなかりしを、さすが名人は違つたものなりと(幸堂)得知子が評せしことありしが、時代世話の差はあれど、今度の音羽屋丈の多助が引込みは、之と一対の佳話とすべし」と評したのは、三木竹二(月草)である。

脚本も、このへんはかなり喜劇風な仕立てになっている。

大詰は本所相生町の炭屋塩原の店先で、多助の所へ振袖を着て来たお花が、決心して薪割りで袖を切る所が、見せ場になっている。原作では、多助が袖を切れというのに、お花が従うことになっているのを、お花自身の発意にしたのも、脚色の働きである。

戦争中に「塩原多助」は二度出たが、はじめの昭和十三年四月の時には、珍しく円次郎という百姓役で十五代目羽左衛門が出た。又のちの昭和十八年五月の時には、当時行われた長袖廃止運動に当て込んだ企画といわれた。戦時演劇史の一挿話である。

このお花の袖を切るしぐさがすむと、上州から炭が届いたというので、多助はもちろん、店中の者は総出、そこに来ていた藤野屋の親子、久八までが手伝って、その俵を運ぶ。大詰の河岸の場で、花道から大ぜいが、賑かな合方で炭を運んで来るところは、「廓文章」吉田屋の、伊左衛門の勘当が許されて、千両箱が運び込まれて来る所と同じく、浮き浮きと春狂言の大団円らしいしめくりだ。

その幕切れに、主人公が「これで多助も」で鬨を直し「男になれやんす」というのは、五代目創案の型だが、それで幕切れらしくキリッと引きしまるのはさすがである。

新七の脚本では、この河岸の前に、お亀が小平に殺され、そのあとで手先に捕えられる場面があった。菊五郎が多助から小平、小平から又多助へと、短い時間に役を変わった努力には、つくづく感心する。

初演の配役は、菊五郎の二役のほか、八百蔵（のちの七代目中車）の浪人角右衛門、原丹次、二代目秀調の角右衛門女房お清とお亀、四代目松助の百姓角右衛門と久八、またたびお角の三役、菊之助の原丹三郎と円次郎、彦十郎の分家太左衛門、栄三郎（のちの六代目梅幸）のお栄とお花、家橘（菊五郎の弟）の奎右衛門等であった。

この興行は田村成義が打った芝居で、企画が当たったために、二十五日の予定を三十三日打ち通し、九千円の収益を挙げたと「続々歌舞伎年代記」に書かれている。

「牡丹燈籠」は、この「多助」の大当りを思い出して、同じ年の夏に柳の下のだじょうを狙ったものである。二つの脚本を比較すると、八百蔵の扮した原丹次と宮野辺源次郎はよく似ているし、小平の悪と伴蔵の悪も、同じような、いかにも下卑た小悪である。円朝の人情噺の特色は、この二つの作を比べてみただけでも、ほぼ想像することが出来る。

多助の経済学は、おそらく円朝の味噌であるうが、その長いセリフの時には、さすがの菊五郎もつい江戸弁になっ

てしまったといわれる。

新七の作と別に、大阪には明治二十二年九月以来、初代中村鴈治郎がしばしば演じた勝蔭蔵の「塩原多助経済鑑」があり、また明治二十九年十二月朝日座で市川市十郎、嵐徳三郎等の演じた「売炭翁青馬曳綱」という脚本があった。商業都市大阪には、実利主義の多助が歓迎されたものと見える。

六代目菊五郎の多助は、明治四十二年三月の市村座が初役で、当時の芸談を「歌舞伎」で見ても、「馬の別れだけはいくらか自分の智恵を出すつもりです」と語っている。彼はその後、大正二年、大正九年、昭和四年、昭和十三年、昭和十八年と演じているが、昭和四年四月の明治座の時が、最も忠実な通し上演であった。ところで近年は、この作あまり上演を見ない。今日の観客には、少し退屈なのかも知れない。

序 幕

下新田作場道の場
庚申塚馬の別れの場

役名 塩原多助。原丹次。幸右衛門伴、円次郎。

本舞台、平舞台、松の立木を見たる野遠見の背景、すべて沼田在田圃道の体。風音にて幕あく。

ト下手より多助馬を引き出る。馬後ずさりする。

多助 ハイ／＼。アレ、われなぜ歩かねえだよ。われが歩いてくれねえと、おらがかゝ様に叱られるだよ。サア歩いてくろ。ハイ／＼。

ト又少し歩いて止まる。

アレ又しやったかね。われ足どうかしたかね。

ト前後の足をみて、

足なんともねえが、どうしただ。ハイ／＼、アレどうしただ、サア歩いてくろよ。ハイ／＼、どうしただよ。

トこの時、下手より円次郎、籠背負い出て、馬に突き当たる。

円次 エッ、誰だ、こんな処に馬おいて。

多助 はい、御免なんしょ／＼。

円次 おゝ、おめえ多助どんじゃねえか。

多助 おゝ、円次どんかね。

円次 わしでござんすよ。おめえどうしただ。

多助 アニ、おらア元村まで、小麦積んで行って帰りが、此処まで来ると青がしやっちゃって、こんな困った事アがんせんよ。

円次 動かねえかね。

多助 どうしても動かねえだよ。

円次 そりゃ困ったナ、足どうかしたかね。

多助 おらア今足見たけど、血溜まり一つしていねえだよ。

円次 青、どうしただ、あんべえわるいか。

ト一寸足を見て、

わし、ちよつくら引いてやんべい。ハイ／＼。

ト引くと馬歩く。

多助 どん、歩くでねえか。

多助 アレ、歩くようになったかね。有難うがんした。こんな横着なやつアがんせんよ。ハイ／＼。

ト馬を引く。一寸歩いて又後へ下がる。

アレ、又しやってしまったよ。

円次 青、なぜ歩かねえだよ。歩かねえと多助どんが又叱

られるだ。歩くだよ、ハイ／＼。

ト又引くと歩く。

多助 どん、歩くでねえか。

多助 こんな不思議な事アがんせんよ。有難うがんした。

ハイ／＼、アレ又しやったよ。

円次 又歩かねえかね。ハイ／＼／＼、多助どん、歩くでねえか。

多助 あんて不思議なこんだ。現在の女房のお栄ッ子にまで馬鹿にされるおらだから、馬にまで馬鹿にされるだか、……円次どん、こんな情ねえ事アがんせんよ。

円次 多助どん、その事は村中で知らねえものはありやしねえから、又誰かに聞かれるといけねえから、そんな事ア言わねえこんだ。

多助 あゝ然うでござんすナ。ハイ／＼、円次どん、又しやってしまったよ。

円次 又留まったかね。コレ青、われ又歩かねえか。じゃ、こうしべえ。おらが代わって引いてやんべいから、この荷かついで後から来てくらっせえ。

多助 そうかね、そうしてくれゝばおらア助かるだ。

円次 コレ青よ、今度はおらだぞ、歩くだぞ。ハイ／＼、多助どん歩くだよ。こんな人見るやつアねえだよ。じゃアあとから来させえよ。

ト円次郎馬引いて上手へ入る。

多助 こんな不思議な事はねえ。此処まで来るとアノ青がしやって歩かねえだよ。女房に馬鹿にされるおらだから、馬にまで馬鹿にされるか。ア、情ねえこんだナ。アレ、円次どんが面白がつて、ずん／＼行ってしまった。おゝい、円次どん／＼。

ト円次郎の荷を背負い上手へ入る。知らせにつき、背景飛ばす。

本舞台やゝ上手寄りに松の大木、その傍に庚申塚、所々能き処に芒沢山、同じく田圃道の体、道具納まる。

ト合方にて、下手より円次郎馬を引き出る。

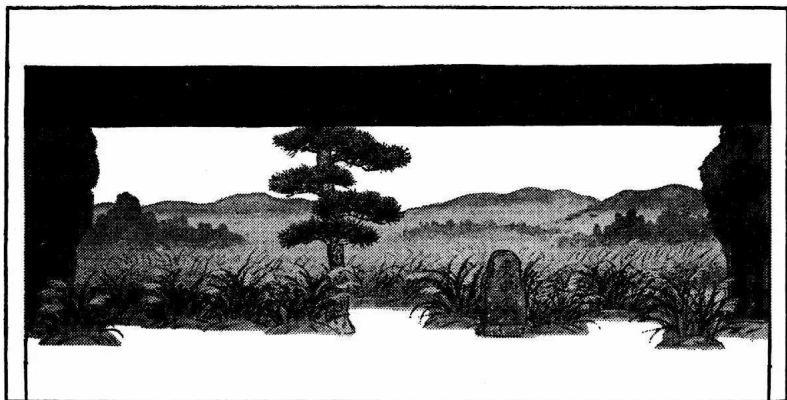
円次 雨はよう／＼やんだけれど、鼻つまゝれても知れねえ暗え晩だ。コレ青、田の中へはまるでねえぞ。ハイハイ。

ト舞台前好き処へ来る。この以前より上手にて、円次、竹鎧を持ち竊いて、この時円次郎を突く。人の来る氣配に円次上手へ入る。多助下手より出て、円次郎に突き当たりそうになる。

多助 エ、誰だ、うなってるのは。

この時馬ぬうと多助の傍へ首を出す。

エ、恠りした。あんだ、こんな処に馬つないで。……ア



場別馬の塚申庚

「青じゃねえか、青が此処にいるからは、そんなら此処にいるのは。」

ト円次郎の傍へ行き、見て、

おゝ円次どんく、どうしただく。

円次 おゝ多助どん、こなた何処も突かれねえかね。

多助 おらア何処も怪我しねえが、円次どん、こなたどうしただ。

円次 おらが此処へ来ると、いきなりおらが横っ腹へ鎗いつつ込まれて、苦しくってなんねえ。とてもおらア助からねえから、構わず此処を逃げてくろ。

多助 あんでおれが逃げられべえ。こなたが先へ来なけりや、おらが青引っぱって、この苦しみをせにゃなんねえ。此処で一緒におっ切られても、逃げられるこんじやがんせんから、そんな弱え氣出さねえで、おらと一緒に内へ帰り、療治して治つてくらっせえ。

円次 いやく、おらア逆も助からねえから、此処でおつ死ぬも是非ねえこんだが、死ぬ前方にたった一言、言つて置きてえ事があるだ。

多助 言つて置きてえ事たアあんでがんすね。

円次 こういう訳だ。聞いてくろよ。

ト合方、虫笛になり、

銭も取らずに逃げただから、追剝に出たこんでもねえ。



多助 尾上松緑

円次郎 市村竹之丞

おらア人に怨まれ、意趣遺恨をうける覚えねえから、コ
リヤこんたを殺そうというたくらみでしたに違えねえ。
この頃村の噂をきくに、おめえのうちへ、親子連れの侍
が毎日入り込んで、おめえのかゝさまや、おめえの嫁っ
子と乳くり合い、こんたを邪魔にするとの事、うっかり
したら、この通りおっ殺されてしまふべいから、用心せ
にやなんねえぞ。今夜のうちにものつん逃げて、身を安泰
にしてくんろ。生ま若え身で、こんな事を意見がましく
言って死ぬも、こんたの分家の太左衛門どのの処へ養子
に行くおらだから、他人のようになと思わねえだ。多助ど
ん、此処に銭が六百あるから、これを持って早く此処を
逃げてくんろ。

へ多助の手をば握りしめ、今際のきわの親身の詞、
多助 それじゃ、おめえさんの詞に従い、此処から逃げや
す。

円次 おゝ然うしてくんろ。多助どん、水を……。

多助 おゝ水かね、待たっせいよ。

ト多助上手へ水を掬いに行く。

へ果敢なく息は絶えにけり。

ト円次郎落ち入る。多助手拭へ水をひたして来て、

円次どん、水のまっせえ。円次どん、水持って来たよ。

円次どん／＼。……ア、到頭こんなになっちゃったか

よ。有難うがんです。わしやおめえさんの末期の意見に従って、六百の銭貰って、此処から江戸へつつ走りやす。必ず塩原の家起こして、円次どんの墓建てやすから、迷わず成仏して下さい。南無阿弥陀仏々々々。

「涙ながらに亡骸を、抱きかゝえて置き直す、荷物も屏風のかた代や。」

トメリヤスになり、死骸を上手の芒の中へ隠し、籠をその傍へ持ち行き、死骸へ油紙を冠せ、以前の財布を持ち行き死骸を拜む。馬を松の木へつなぎ、カマスの餌を馬に食わせようとする。馬食わぬので片づけ、油紙をひろげ馬にかけてやり、馬の鼻づらをなでる。

「多助は馬に打ち向かい、青よ、われたア久しい馴染だったナ。」

ト合方になり、

わりや大原村の九兵衛どんが、南部の盛岡の市で五両三分で買って来たを、おらのとっ様に買われただ。おらアその時八つだったが、塩原の内へ養子に来るので、われの背中へ乗ってこの沼田へ来ただが、おらア十二の時から引き馴れて、こうやってなげえ間一緒に居れば兄弟も同じ事だ。わりや達者な馬で、今までナイラ一つ起こして、くさめ一つした事ねえだ。それに十六貫目の四斗俵二俵つけるなア当たりめえだが、三俵となると疲れべえ

と思つて、山坂越える時は、おらが一俵かついでやるようにするから、今までがんじょうで、それにとっ様が年に三度ずつ金焼きしておいただし、おら、かや草食わしたから、足イ血溜まり一つ出来た事なく、能く働いてくれただから、われもだん／＼年とるだから、楽させてやんべえと思つていたが、おらアどうあつても内に居られねえだ。われも知つての通り、うちのかゝ様とかゝあが料簡違いなやつで、おらを殺すべえとするだという訳は、われも今見た通りだ。一方ならねえ大恩のある円次どんを、此処へ置いて逃げるというはすまねえ訳だが、末期の意見に従つて、この儘国を立ち退くが、心残りは円次どんの死骸とあの荷物だ。われ此処にいて番をして、おらの代わりをしてくんる。われも只の馬と違うから、これまでおらをかばつてくれたが、どうでも別れなきやならねえだ。青よ、実に別れがつれえだよ。

「言い聞かすれば頭をうなだれ、

おらアこれから江戸へ行つて、奉公をして金を溜め、国へ帰つて来るから、われそれまで達者でいてくんるよ。おらが出れば定めて吾八もおん出されべえ。吾八が出れば誰もわれに構うものがねえから、われにろくな喰物もあてがうめえ。可哀想でなんねえから出めえと思うが、おらが内にいれば殺されてしまうべえ。われ辛かんべえ